文化大革命と毛沢東の水泳

高　嶋　　航

はじめに …… 249
Ⅰ　初めて長江を泳ぐ（1954–1963年）…… 252
Ⅱ　十三陵水庫の水泳とその報道（1964–1966年）…… 255
Ⅲ　長江水泳と文化大革命（1966年7–8月）…… 259
Ⅳ　長江水泳の遺産（1967–1976年）…… 265
おわりに …… 268

はじめに

1966年7月16日、武漢に滞在中の毛沢東は長江を泳ぎ下った。7月25日、長江を泳ぐ毛の写真と長江大橋を背景に船上で白いガウンを着て手を振る毛の写真が『人民日報』の第1面を飾った。7月28日、吉林省四平市の中学生張新蚕はこの知らせを聞いて、心から毛主席の長寿と健康を祝福しつつ、日記にこう記した。

> 毛主席という方は、なんと人民を熱愛し、人民に関心を寄せておられるのでしょう。私たちが「毛主席万歳」と呼ぶと、あの方は「人民万歳！」と返される。あの方はなんと謙虚なのでしょう！人民は永遠に毛主席と革命の道を勇躍前進しよう！[(1)]

あるいはこのニュースはラジオを通じて張の耳に届いたかもしれない[(2)]。いずれにせよ、しごくありふれた文革の一コマのように思える。

ところで、一女子中学生に革命の道を歩むことを宣言させた毛沢東の水泳とはどのようなものだったのだろうか。インターネットで検索すると、このときの毛沢東の様子を映した動画を見ることができる。長江を悠然と泳ぐ毛沢東の姿には、革命という言葉が想起さ

せるような激しさを微塵も感じることができない。もし毛沢東を知らない人がこの映像を見たら、老人が水と戯れているというくらいにしか感じないだろう。しかし、この映像を見る人のほとんどは、泳いでいる人が毛沢東であることを知っている。さらに、泳いでいる場所が長江であり、それが1966年7月16日の出来事であることを知っている人も多いだろう。そもそも毛沢東を知らないような人は、この映像を見る機会もないだろうし、たとえ見たとしても記憶にとどまることはないはずである。

映像が示すのは、水のなかで泳いでいる老人の姿にすぎない。我々はその映像にさまざまな意味を付与し、一つの物語として理解している。換言すれば、我々は水泳をする毛沢東の姿を、あらかじめ決められたフレームを通してしか見ることができない。しかし、そのフレームは固定したものではない。現在の我々は、毛沢東がこの直後に北京に行き、紅衛兵を味方につけ、劉少奇を打倒したことを知っている。さらにこの文化大革命（以下、文革）の嵐が10年にわたって中国全土に吹き荒れたことも知っている。いまこの映像を見て、革命の道を前進しようと本気で考える人はまずいないだろう。しかし、1966年7月という時点ではそうではなかった。「毛主席と革命の道を勇躍前進しよう」と日記に記した少女は、紅衛兵となって実際に革命の道を歩んだのである。

国家の指導者や権力者が裸体（もちろん、水着をつけて）で公衆の前に現れるという事例は、じつはあまり多くないのではなかろうか。1919年8月21日、フリードリヒ・エーベルトは新しく誕生したヴァイマル共和国の大統領に就任した。それと時を同じくして刊行された *Berliner Illustrirte Zeitung* 誌はエーベルトとグスタフ・ノスケ国防相が水着姿で並んで立っている写真を表紙に掲載した。締まりのない二人の水着姿はさっそく嘲笑の的となり、新しい共和国の将来に暗雲を投げかけることになった[(3)]。一方でそれは、いかめしいヴィルヘルム2世とは異なる新しい指導者のイメージを伝えもした。

同じころ日本では、水泳する皇太子の映像が人気を博していた。大正期の日本のメディアは皇太子ら若い皇族を平民的で健康なスポーツマンとして描いた。しかし実際には、皇太子裕仁の身体はおよそ強健にはほど遠く、近眼で、猫背で、正座ができないなど、将来の天皇にふさわしくないと周囲から危惧されていた。世間に流布されるイメージと実態とのギャップは、本人もよく承知していた。皇太子は自分に関する報道に「過誤」が多いことから、側近に「新聞はあてにならぬよ」と語ってさえいる。病気がちの大正天皇、世界的な君主制の危機、デモクラシー思想の高潮など皇室や日本をとりまく情勢が、平民的で健康的なスポーツマンという皇太子のイメージを要請していた[(4)]。ところが天皇に即位する前後から、裕仁がスポーツをすることに対して右翼から批判が起こるようになり、スポーツをする裕仁の姿は徐々にメディアから消えていった。皇太子に期待されるものと、天皇

に期待されるものには、おのずと違いがあったのである。

裕仁の場合、そのイメージは、自身の欲望よりも、他者の欲望によって創られた。この点、毛沢東なら自身のイメージをかなりの程度操作することが可能だったと考えられる。しかし一方で、そのイメージを欲望する存在も必要だった。それがなければ、嘲笑の的となったエーベルトの二の舞となったであろう。とするなら、冒頭に掲げた毛の水泳とそれに対する一中学生の反応は、まさしく双方の欲望が一致した事例とみなすことができる。ただ、このような欲望は瞬時に形成されるものではない。また、長寿や健康を表現する手段として、あるいは人民を熱愛し人民に関心を寄せていることを示す手段として、水泳を選択する必然性もない。

なぜ毛が本格的に文革に乗り出すに当たって長江を泳いだのか、毛はこの水泳にどのような意味を込めようとしたのか。この問題については、すでにさまざまに論じられてきた[(5)]。毛の水泳の政治的意味を考察する研究の多くは1966年以前の状況を重視していないが、毛は長江で泳げば人民がどのようにそれを解釈し反応するかを計算に入れていたはずである。換言すれば、毛が長江で泳ぐことを解釈するフレームはすでにある程度できており、毛も人民もそれに則ってふるまったのではないか。フレームはたえず構築され変化していくものだとしても、1966年までにどのようなフレームが構築されていたか――より具体的には、水泳と革命、あるいは毛沢東の水泳と毛沢東の革命がいつからどのように結びつけられていたか――を確認することは、毛の水泳の政治的意味を考えるうえで不可欠の作業ではないか。これが本稿の基本的スタンスである。より具体的に言えば、メディア、とくに『人民日報』(ただし、同紙はつねに毛の意図を反映していたわけではない）が毛沢東の水泳のなにをどのように語ったか、あるいは語らなかったのか、その語りが社会にどのような影響を与えたのかを跡づけるとともに、そのフレームがその後いかに変化したか、またそのフレームを共有しないものにとって毛の水泳はいかなる意味をもったかを考えてみたい。

先行研究のうち、于帆「毛主席暢游長江：従事件、話語到図像」は、毛の水泳という事件そのものと、事件を描写する言説や図像を区別して考察する点で本稿のスタンスと近い。于の論点には、①1966年以前は毛の水泳がほとんど報道されなかった、②「大風大浪」「江河湖海」など毛の水泳と関係の深い言葉は1966年以前の報道にすでに見られるが、その多くは『新体育』『体育報』のような体育関係のメディアで、水泳運動や体育鍛錬といった意味で用いられていた、③毛の水泳と関係が深い「舵手」のイメージは1965年の革命歌曲「大海航行靠舵手」に由来し、それが革命言説の中心となったのは1967年である、④「万寿無疆」という言葉は毛沢東専用のもので毛の健康に対する焦慮を反映している、⑤「大

風大浪」を主題とする図像はやや遅れて登場したため、そのプロセスは事件そのものと直接関係がなかった、などがある。

以下、第1章は新中国成立後から1963年までを扱う。この間、毛は水泳を再開し、1956年に初めて長江を泳ぐが、毛の水泳に関する報道は抑制されていた。ここでは、于の論点①が正しいことを再確認する。1964年から1966年7月までを対象とする第2章では、十三陵水庫での水泳とその報道を考察する。この考察を通じて、水泳と革命の結びつきが1966年以前にすでにある程度形成され共有されていたことを明らかにし、于の論点②に異議を唱える。第3章は1966年7月の毛の長江水泳に関する国内外の報道を検討する。すでに形成されていた水泳と革命の結びつきを土台としつつも、紅衛兵運動の展開にともない、水泳に新たな意義が付与されていく過程を示すとともに、水泳を解釈するフレームを共有しない西側（とくに日本）のメディアで毛の水泳がまったく違った受け止められ方をしたことを紹介する。第4章では、1967年以後に毛の長江水泳がそれを記念する水泳大会や言説を通じてどのように継承され変容していたかを明らかにする。

Ⅰ　初めて長江を泳ぐ（1954–1963年）

湖南省韶山の毛沢東故居の前にある池には、かつて「毛沢東同志少年時代游泳過的地方」という看板が立っていた。周世釗の伝えるところでは、毛は12歳のときに大病を患ってから、身体を鍛錬することを決意し、この池で泳ぎをマスターしたという[(6)]。湖南第一師範学校時代には、蔡和森らとよく湘江を泳いだ[(7)]。しかし、そのあと新中国成立までは革命活動に没頭し、水泳を楽しむ暇はほとんどなかったようである[(8)]。

1954年夏に北戴河に滞在したさい、毛は海水浴を楽しみ、「浪淘沙・北戴河」と題する詞をよんだ（毛の戸外における水泳については表1を参照）。毛が恒常的に水泳をするようになったのは、この年の秋のことである。このころ毛は散歩、ダンス、卓球をしていたが、卓球にはそれほど積極的ではなかった。そこで卓球に代わる心身鍛練の方法として「保健医生」が水泳を推薦し、清華大学の室内プールに通うことになった。11月に広州に滞在したときには、毎日のように越秀山のプールで泳いだ。毛自身は珠江で泳ぎたかったのだが、毛の安全確保を担当していた広州市副市長兼市公安局長の勧告により断念した。しかしながら、若いころ自然の中で水泳を楽しんだ毛にとって、プールでの水泳は物足りなかったにちがいない。

翌1955年6月に杭州に滞在中、毛は銭塘江で泳ぎたいと言い出した。衛士の孫勇が派遣され、実際に泳いで安全を確認してから毛が泳いだ。ついで湖南に立ち寄った毛は湘江で

泳ごうとした。幼なじみの周世釗が止めるよう勧告したが、毛は聞かなかった。湖南省体育運動委員会の水泳隊員が召集され、その同伴で毛は懐かしの湘江を泳いだ。このあと毛は湖北省と武漢市に対して長江を泳ぎたいと申し出た。武漢市公安局は、①川の水が汚く、吸血虫など多くの病原菌を含んでいること、②川にはワニ、スナメリ、水蛇など人に害を与える動物がいること、③川の流れが強く、渦が巻いていることを理由に水泳は困難であるとの見解を示した。これらの理由は1922年に西村節が長江を泳ごうとしたときに、その水泳の不可なる理由として挙げられたものとほぼ同じである[(9)]。実際には、西村をはじめ多くの人が長江を泳いで渡ったと考えられ、1930年代には長江を泳いで横断する大会が3回開かれている[(10)]。公安局がそのことを知らなかったはずはなかろうが、なにしろ泳者が毛主席であり、しかも62歳の高齢だったから、不測の事態が起こることを懸念したにちがいない。湘江のときと違って、毛はおとなしく勧告に従った。長江は泳いだことがなかったから、毛にもすこし不安があったのだろう。しかし彼は諦めたわけではなかった。

1956年5月、毛沢東はふたたび長江での水泳を提起した。周囲は反対したが、毛の意志は固かった。副衛士長の孫勇が武漢に派遣され、武漢市公安局と準備を進めた。毛が泳ぐことは秘密にされ、公安局は水泳大会を開くという名義で水泳の名手を選抜し、一か月にわたって訓練を重ねた。かく万全の準備が整ったところで毛がやってくる。5月31日に長沙から飛行機で武漢入りした毛は、さっそく長江に身を浮かべた。2時間余りを費やし、30里（1里は500メートル）を流れ下った。王任重（湖北省委書記）と楊尚昆（中央辦公庁主任）もともに泳いだ。毛はよほど長江での泳ぎが気に入ったとみえ、6月2日と3日にも長江を泳いでいる。最後の日には長江の両岸に数万の民衆が集まり、「毛主席万歳」の声が絶えなかった。

大々的に報道された1966年のときとは違って、1956年に毛が長江を泳いだことはまったく報道されなかった。もっとも、この前後の時期の『人民日報』には、武漢の水泳に関わる記事が3件掲載されている。6月3日の記事は、前月24日に陳善美が女性として初めて長江を泳いで渡ったことを伝えている。また6月25日と7月3日の記事は、「支援解放台湾横渡長江競賽」が開催され、約2,000人が参加したことが報じられた。この水泳大会が毛の水泳と無関係ではなかったにもかかわらず（そのことは武漢市民には明白だったはずである）、「支援解放台湾」なる言葉を冠して開かれ、『人民日報』の記事も毛にはまったく触れなかった[(11)]。翌年には「全国横渡長江游泳競賽」という名称のもと第二回大会が開かれるが、これを報じた『新体育』もやはり毛に触れなかった[(12)]。

メディアは毛の水泳に関する報道を意図的に抑制していた。その理由は、1956年2月のフルシチョフによるスターリン批判に求められるだろう[(13)]。このことは、『人民日報』と

『文匯報』で「偉大領袖毛沢東」という言葉の頻度を調査し、「毛沢東の偉大さ」が強調される度合いが時期により異なることを明らかにした金野純の研究の結果とも一致する。金野によれば、1956年から1958年は「偉大領袖毛沢東」への言及が最も少ない時期であった[14]。

とはいうものの、毛の水泳は間接的な形で伝えられていった。長江での水泳にすっかり気をよくした毛は、その興奮冷めやらぬなか「水調歌頭・長江」と題する詞をよんだ。この詞は1957年1月30日の『人民日報』に「水調歌頭・游泳」という題で、「浪淘沙・北戴河」とともに掲載された[15]。「水調歌頭・游泳」は毛が自らの水泳をいかに位置づけ、いかに演出しようとしたかを考えるうえで重要である。人口に膾炙した「万里長江横渡、極目楚天舒、不管風吹浪打、勝似閑庭信歩（万里の長江　横(よこぎ)っておよぎ渡れば、目のかぎり　楚天　舒(ひろが)る。風吹くとも　浪打つとも　不管(かまわじ)、閑けき庭を信歩(すずろあるき)する似(よ)り勝りたり[16]）」という一節からは、雄大な中国の大地で厳しい自然を相手に悠然と構える毛の姿が浮かび上がる。また、詞の後半では当時建設中の長江大橋と計画中の三峡ダムを描いて新中国における社会主義建設の成功を示唆している[17]。かくして、長江に象徴される中国の大地は毛沢東の身体を通して輝かしい未来へと結びつけられるのである。毛沢東は生涯に45回長江を泳いだが、そのうち42回が武漢であった[18]。彼がこれほどまで武漢にこだわったのは、長江大橋の存在によるところが大きい（毛の長江水泳を取り上げた図像の多くに長江大橋が描かれている）。

毛による体育の実践をメディアが報道しはじめるのは、1958年になってからである。1958年3月の『新体育』には、毛沢東のデビュー作である「体育之研究」（初出は『新青年』第3巻第2号、1917年4月1日）と「毛主席青少年時代的体育生活」が掲載された。この2篇は人民体育出版社から内部発行という形でも刊行され、5月には人民体育出版社が刊行していた『中国体育史参考資料』第3輯に収録された[19]。9月からは『新体育』が周世釗「毛主席鍛錬身体的故事」を連載した。1959年1月の『新体育』は毛が周世釗に送った「水調歌頭・長江」（「水調歌頭・游泳」の原題）の影印を掲載した。これに附された説明文には「毛主席が長江を泳いで渡ったという故事は、数年前に人々の間で伝えられたことがあった。この詞の発表により、その伝説が本当であったことが証明された」とある。この時点まで毛の水泳が「伝説」にとどまっていたことを物語っている。

中央美術学院の学生だった李秀実が建国10周年慶祝のために「水調歌頭」を題材にした絵の構想を練りはじめたのはちょうど1959年初めのことであった。李は南京や武漢で取材をし、7月に作品を完成させた。「万里長江横渡」と題されたその絵はたちまち大きな反響を呼び、『人民日報』『光明日報』『中国青年報』など数多くの新聞・雑誌で取り上げられた

図1　李秀実「万里長江横渡」（https://artist.artron.net/yishujia0002662/2-236165.html）

（【図1】）。しかし、李自身は芸術に没頭して政治に無関心な学生だとして批判の対象となっており、この絵はまもなく姿を消してしまう[20]。

1960年3月、毛沢東は愛国衛生運動をふたたび発動することを命じた指示のなかで、体操、球技、駆け足、登山、水泳、太極拳などの体育運動を提唱するよう呼びかけた。これを受けて国家体育運動委員会、教育部、中国共産主義青年団は4月に「関於在青少年広泛開展田径運動競賽」、6月に「関於在青少年中大力開展游泳活動」の通知を出し、これを受けて各地で大衆水泳活動が展開された。『人民日報』によれば、衛生工作、民兵訓練、軍事野営活動と結びついていることがこれらの活動の特徴であった。大躍進期ということもあり、参加人数の多さは目を見張る。武漢では長江横断水泳大会に1万人が参加した[21]。

表1からわかる通り、毛の戸外での水泳のほとんどが1962年以前になされている。しかしながら、この時期に毛の水泳が積極的に報道されることはなかった。水泳が毛と強く結びつけられることはなく、それが革命と結びつけられることもなかった。1960年には毛の指示を契機に大衆水泳活動が展開されるが、体育の一環としてなされたもので、水泳に特別の地位が与えられたわけでもない。李秀実「万里長江横渡」は毛の水泳を視覚化し、大きな反響を得たが、李自身の政治的問題のために姿を消した。この時点では、いまだ毛の水泳を解釈するフレームは形成されておらず、たとえ毛の長江が大々的に報じられたとしても、1966年と同様の効果を得ることはできなかっただろう。

Ⅱ　十三陵水庫の水泳とその報道（1964–1966年）

1958年5月25日、毛沢東は劉少奇、周恩来、朱徳らと十三陵水庫の視察に出かけた。十三

陵水庫は北京の水源地としてこの年の初めより建設が進められ、6月末に竣成する。大躍進を代表する事業であった。それから6年後の1964年6月16日、軍事演習の検閲のため十三陵水庫を訪れた毛は、劉少奇とともに50分ほど水庫で泳いだ。後述するように、十三陵水庫での毛の水泳が報道されるのは1年後のことだが、その影響は即座にあらわれた。7月2日の「部隊が游泳活動を展開することに関する指示」は次のようにいう。

> 部隊は水泳を学ばねばならない。あらゆる部隊はマスターしなければならない。水泳を学ぶには法則がある。法則をつかめれば容易にマスターできる。営や団の全体が完全武装で泳ぎ渡ることができねばならない。各団でまず一つの営から始め、各師でまず一つの団から始め、やがて全体ができるようになる[22]。

7月12日、国家体育運動委員会の幹部、北京体育学院の運動員、『体育報』の編集者と職工ら460名あまりが十三陵水庫で水泳をした。同月15日刊行の『体育報』は「江河湖海へ行って泳ごう」と題する社説を掲載し、「群衆性的游泳」を呼びかけた。水泳は、身体を鍛錬し、生活を活性化し、人々の体質を増強するだけでなく、生産と国防に役立つとされた。さらに、社説は江河湖海で水泳することの意義について、江河湖海の多くは水が流れ、風浪もあれば逆流もあり、水泳の「真本領、硬功夫」を鍛錬できると説いている[23]。これは毛が1958年9月12日に武漢で泳いださいに「江河で水泳するのは、逆流もあり、意志と勇敢を鍛錬できる。プールを飛び出さねばならない」と語ったことを踏まえている[24]。

7月23日、国家体育運動委員会は各地の体育運動委員会に対して、水泳、射撃、通信、登山の活動を展開し、農村では民兵訓練と結合させて水泳と登山を実施するよう指示した。『人民日報』が評するように、これは生産と国防建設に奉仕し、全民皆兵に適応するための重要な措置であった[25]。

7月24日以降、各地で大規模な大衆水泳活動が展開したことが『人民日報』の報道に見える。24日に99名の女学生を含む1,817人の中学生が北京の昆明湖を横断した。26日に100人あまりの女学生を含む1,800人あまりの大学生が十三陵水庫を泳いだ。武漢で第9回長江横断水泳大会が開かれ690人あまりが参加した。ハルビンで今年6回目となる松花江横断水泳に200人あまりが参加した。8月2日に廈門と鼓浪嶼の間を横断する水泳に約2,600人が参加した。16日に上海黄浦江の横断に2,000人近くが参加した[26]。

9月10日、『人民日報』は社説「到大風大浪中去鍛錬、征服江河湖海」で、今夏は松花江から海南島にいたるまで、全国各地で人民解放軍の官兵、民兵、人民大衆が水泳活動に参加したこと、江河湖海で水泳し、大風大浪のなかで鍛錬することが、すでに全国軍民の積

極的行動となり、軍民の体質を増強し、生産建設と国防強化を促進したと総括した。さらに社説は人民解放軍のこれまでの強行渡河の歴史を振り返り、毛沢東の水泳の実践に触れたうえで、水泳に以下のような新しい意義をつけ加えた。大風大浪のなか江河湖海で水泳するには勇敢な精神と一定の技術が必要である。勇敢な精神は政治思想から来るのであり、毛沢東の著作を読み、毛沢東思想で頭を武装しなければならない。また水には一定の法則があり、それに通じれば恐れるに足りない。水泳はちょうど社会主義大革命の大衆運動で大衆を発動するようなものである。まさしく毛沢東が「中国革命戦争の戦略問題」（1936年）で「戦争を指導するには戦争の水泳術を習得しなければならない。社会主義大革命の大衆運動を指導するには大衆運動の水泳術を習得しなければならない。大衆運動の水泳術を習得するには、水のなかで水泳を習得しなければならないのと同じように、まずは思い切って水に入り、思い切って大衆運動の第一線に身を投じなければならない」と述べた通りである、と。このような主張は、文革中の「游泳のなかから游泳を習得する」（後述）の原型といってよい。国家体育運動委員会が推進した四種目の運動のなかでも、水泳は特別な地位を獲得したことになる。一方で、安全への注意を呼びかけている点は、文革期と大いに異なる。

1965年5月21日、『解放軍報』は社説「打破水的障碍、取得機動自由」で、林彪副主席が毛主席の呼びかけに応じて計画的に水泳運動を展開することを全国の軍隊、青年、民兵に指示したこと、人民解放軍総参謀部、総政治部もそれぞれ水泳運動に関する指示を出し昨年以上の成績を収めるよう求めたこと、アメリカ帝国主義がベトナム戦争を拡大しつつある状況で水泳は重大な戦略的意義を持つこと、水泳を学ぶのは革命のためであり戦争のためであることを主張した[(27)]。同年2月のアメリカ軍による北爆を受け、4月12日に中共中央は戦争準備強化の指示を採択していた。4月22日、林彪はこの問題について毛に報告するが、そこには戦争準備のために水泳を学ぶことが含まれていた[(28)]。人民解放軍の水泳学習運動は、毛の了解のもと準備に1か月をかけたうえで始められたのである。

5月27日、『人民日報』は1面に「毛主席劉主席暢游十三陵水庫」（作者は体育報記者と解放軍報記者）を掲載した[(29)]。1年前の十三陵水庫での毛の水泳を描写したこの記事は、他の多くの新聞雑誌に転載され、その内容は広く知られることになる。

なぜ1年前の出来事がいまになって報道されたのか。5月21日の『解放軍報』社説にある「突出政治」という言葉が一つの手がかりとなる。そもそも、十三陵水庫での軍事検閲は、1964年1月から10月まで人民解放軍で実施された「大比武」と称される大規模な軍事訓練の一環であった。しかし、この大比武の評価を巡って、総参謀長羅瑞卿と国防部長林彪の間に論争が生じていた。1964年11月30日に林彪は全軍組織工作会議で「政治を突出

させる」ことの重要性を説き、軍事訓練を重視する羅を批判した。羅は毛が重視する民兵の充実とともに、生産の向上や正規軍の近代化にもつとめていた（その成果の一つが1964年10月の原子爆弾実験成功であった）。これに対して、林は徹底した人民戦争の支持者で、政治工作を重視していた。結局、「突出政治」は林が羅を失脚させるに当たって重要な道具となった（羅は1965年12月に総参謀長辞任に追い込まれた）。とするなら、「毛主席劉主席暢游十三陵水庫」は、毛と劉の水泳を「突出政治」の観点から位置づけなおすことで、大比武とそれを推進した羅を批判したのではないか。5月半ばといえば、ちょうど水泳活動が始まる時期である。林はこれから始まる水泳活動を自らの理論によって位置づけ、それを毛の権威で補強するために、十三陵水庫での毛の水泳を引っ張り出してきたのではないか。

おりしも、人民解放軍では林の主導で毛に対する個人崇拝が進展していた。毛に対する個人崇拝はスターリン批判後もさまざまな形で継続され、また毛自身もそれを否定することはなかった。しかしそれが人民解放軍で大々的に推進されるのは林が軍の実権を握ってからである。1964年5月に刊行された『毛沢東語録』はその象徴であろう[(30)]。『毛沢東語録』が精神面での毛のカリスマ性をアピールするものだったとすれば、毛の水泳は身体面でのカリスマ性をアピールするものであった。それは、軍隊で信頼を勝ち得るには不可欠のものだったに違いない。

この記事の最後は次のような言葉で結ばれる。

> みなは偉大な領袖の身体がこれほど健康であることを目にして、青年に対する偉大な領袖の関心と期待に思いを致し、無限の喜びに満たされ、心の底から「敬愛する領袖よ、我々は必ずあなたの言葉に従い、大江大海で鍛錬し、革命闘争の波風のなかで鍛錬し、何ものも恐れない戦士となり、永遠に変節することのないプロレタリア階級の革命の後継者となります」との誓いを発した。

この日毛と一緒に泳いだ青年たちは、毛の健康を祝福し、毛からの関心と期待に喜び、毛に従って革命の道を歩み、その後継者となることを誓った。この記事を本論冒頭に掲げた女子中学生の日記と比べてもらいたい。『人民日報』の記事は青年たちの実際の感じ方や振る舞いを伝えたのかもしれないが、より重要なのは、それが毛の水泳を解釈するフレームを提供するものでもあったということである。1年後の女子中学生はこのフレームを見事に内面化していたのである。もちろん、この女子中学生が「毛主席劉主席暢游十三陵水庫」を読んでいたかどうかはわからない。しかし、「毛主席劉主席暢游十三陵水庫」は林彪

が推進していた毛沢東崇拝の一端であり、この女子中学生もその流れのなかに身を置いていたことは間違いない。

1965年の夏は、前年にもまして大規模な水泳活動が展開され、『人民日報』にも数多くの関係記事が掲載された。前年の『人民日報』は各地の水泳活動を具体的な参加者数を挙げて紹介していたが[31]、この年の『人民日報』には参加者数を挙げた記事はなく、段階を踏んで水泳を学ぶこと、安全に注意すること、無理に一律を求めたり大規模な動員をしたりして生産、労働、学習に影響を及ぼしてはならないこと、水泳訓練は重要な戦略意義を有するが畢竟わが軍の建設全体の一側面にすぎないこと、大衆の自主性と積極性を重視し錦標主義（勝利至上主義）や形式主義を防止することなど[32]、事細かな注意が「突出政治」の必要性とともに繰り返し語られた。これは裏を返せば、水泳が革命や毛沢東への支持を示す指標となるなかで、初心者に無理矢理水泳をさせたり、水泳運動の参加者数を誇ったりするような傾向が存在したことを物語る（7月に武漢で開かれた長江横断水泳大会には過去最大の2万人が参加している（表2参照））。報道はされなかったものの、多くの事故が発生していたのだろう。

1966年4月14日、国家体育運動委員会、人民解放軍総参謀部など9つの単位が共同で今年度の水泳活動に対する意見を提出した。そこでは、今年も政治を突出させ、広大な幹部と大衆に「革命のために水泳する」ことを呼びかけ、大いに意気込み、着実に大衆水泳活動を展開することが示されていた。昨年の活動については、早くから始め、素早く発展し、人数が多く、大きな効果があり、規模もこれまでにないもので、全国の軍民、とりわけ青少年が積極的に参加し、人民の体質を増強し、広大な大衆が国防に服務する観念を強化するのに役立ったと総括した。また、いたずらに規模や人数を追い求めず、恒常的にそれぞれの場所で着実かつ安全に活動を展開することも求めた[33]。こうして、1966年も基本的には昨年と同じ方針で水泳活動が実施される予定であった。

Ⅲ　長江水泳と文化大革命（1966年7–8月）

毛沢東は1965年11月から南方各地を転々とし、文革に向けた準備を着々と進めていた。この間、毛は公の場にほとんど姿を見せず、海外では毛沢東重病説が飛び交っていた[34]。6月28日から武漢に滞在した毛は、7月16日に長江を泳ぎ、18日に北京に戻った。そして、この日から亡くなるまで、毛は中南海のプールに居を構えることになる。毛が長江で泳いだことが各新聞で報道されるのは、北京に戻ってから1週間後、25日のことだった。8月1日から毛の主宰で八届十一中全会が開催され、劉少奇は実質的に毛の後継者の地位を失っ

た。また毛が紅衛兵らの「造反に理が有る」ことを表明したことで、全国の青年が造反に立ち上がった。18日に紅衛兵の出で立ちをした毛は、天安門上で100万の大衆と紅衛兵を接見することになる。

毛が北京に戻った翌日（7月19日）、『人民日報』は16日に武漢で開催された水泳大会の模様を以下のように報じた。「我らが最も敬愛する偉大な領袖毛主席がかつて泳いで渡ったことのある長江」で第11回長江横断水泳大会が開催され、5,000人あまりが参加した。この大会は毛主席の提唱で開催されてきたもので、武漢市民は「江や河で水泳するのは、逆流もあり、意志と勇敢を鍛錬できる」との指示のもと、革命のために水泳する自覚を高めてきた。とくに青年たちは「水泳は大自然と闘争する一種の運動である。あなたがたは大江、大海に行って鍛錬しなければならない」という毛主席の教えに従って水泳活動を実践し、毛主席が初めて長江を泳いだ後に生まれた子供も「風吹くとも　浪打つとも　不管（かまわじ）、閑けき庭を信歩（すずろあるき）する似（よ）り勝りたり」となっている。「時代は変わった。男女はみな同じだ。男の同志にできることは女の同志にだってできる」という毛の言葉どおり、昨年は女性の民兵が武装で長江を横断し、今回も200人あまりの女子隊と200人あまりの少年隊が参加している。参加者は赤旗や『毛沢東語録』の言葉などを記したプラカードを掲げて泳ぎ、アジア・アフリカ緊急作家会議の代表たちがその様子を参観した。ある参加者はこれが「中国の人民がいかなる困難をも克服することができることを象徴している」と述べた。

1年前には大会の報道すら抑制されていたが、今回は詳しい描写とともに、参加者の多さが強調されている。また、水泳にまつわる毛の言葉を数多く引用して水泳を意義づけ、現場に居合わせた外国人にその意義を確認させるという手の込みようである。アジア・アフリカ作家緊急会議は6月27日から7月9日まで北京で開催され、日本を含むアジア・アフリカの53か国と5つの国際組織の代表170人あまりが出席した。会議後、一部の出席者たちは武漢に連れてこられ、この壮挙の証人となった。

この報道で奇妙なのは、その場にいたはずの毛に一言も触れない点である。地元紙の『湖北日報』や『武漢晩報』は、「水調歌頭・游泳」と水辺でくつろぐ毛の写真（大会とは関係ない）を掲載して毛の存在を暗示したものの、大会そのものに関しては、『人民日報』の記事を転載して済ませている。毛が現場にいたことを多くの武漢市民が知っていたにもかかわらず、である。

さらに不思議なのは、7月21日の『人民日報』でふたたびこの大会が取り上げられることである。今回は大会の詳しい状況、外国人作家と中国人（作家や大会参加者）との会話が中心で、その焦点はもっぱら毛に当てられ、毛が中国人民の領袖というだけでなく、世界人民の領袖であることが強調されている[35]。それでも、記事は毛が現場にいたことに触

れなかった[36]。その理由は、言うまでもなく政治的なものであった。8か月あまりも北京を留守にしていた毛は、文革を推進するに当たって北京の情勢を見極める必要があった。その準備に1週間を要したということだろう。あるいは、長江の水泳大会の記事の反応を見極めていたのかもしれない。

毛が長江を泳いだことが『人民日報』の第1面で報じられるのは7月25日である。それは『湖北日報』や『武漢晩報』も同じであった。記事は「我らが偉大な領袖毛主席は、1966年7月16日、ふたたび風に乗り浪をけって長江をのびやかに泳いだ……10年前の6月、毛主席は3度にわたって武漢で長江を泳ぎ、輝かしく勇壮な詞「水調歌頭・游泳」を書き残した。10年後の今日、毛主席はまた長江での水泳を楽しみ、1時間5分で30里近くを泳ぎ、まさに「風吹くとも　浪打つとも　不管(かまわじ)、閑けき庭を信歩(すずろあるき)する似(よ)り勝りたり」のとおりであったという一節で始まる。そして、大会の様子を、毛を中心に語り直した。記事には、長江大橋を背景に毛が白いガウンを着て船の上から大会の参加者に向かって手を振っている写真と（白いガウンは明らかにブルジョア的だが、もちろんそのような解釈は許されなかった）、毛が頭だけ出して泳いでいる写真、さらに船に囲まれて多数の参加者がプラカードを掲げて泳いでいる写真が添えられた（『湖北日報』と『武漢晩報』も同様）。

同じ出来事が短期間に3回にわたって『人民日報』で報じられるのも尋常ではないが、これは一連の水泳の記事の始まりでしかなかった。7月26日から8月17日まで連日のように水泳に関する記事が『人民日報』の紙面を埋めた。

7月26日の社説「跟着毛主席在大風大浪中前進」は以下のように記す。毛の水泳が報じられると、人民は毛主席の健康と長寿（「万寿無疆」）を心より祈り、毛が心身ともに充実していることが全中国人民の最大の幸福、全世界の革命人民の幸福となっている。激しく流れる万里の長江は中華民族の歴史、中国革命の歴史の象徴であった。水泳を習得するにはその法則を把握する必要があるように、革命をするにも法則があり、それを把握してこそ階級闘争をコントロールできる、と。こうして、長江で大風大浪にたじろぐことなく悠然と泳ぐ毛の姿は、中国共産党を率いて中国人民とともに内戦や対外戦争、そして階級闘争を戦い、勝ち抜いてきた毛の姿に重ね合わされた。毛と泳いだ5,000人の大会参加者は、毛の思想と実践を学び、毛とともに革命に邁進する「七億人の人民」の縮図であった。このような毛と人民の関係を、世界各国の作家たちは目睹し、承認したのだ。長江で泳ぐという毛の行為は、綿密に計画された舞台設定と、周到に準備された意味づけによって、文革と結びつけられたのである。

ここで改めて強調しておきたいのは、このような解釈のフレームが一朝一夕で形成されたのではないということである。それは毛の水泳の実践、大衆水泳活動の展開、毛に対す

る個人崇拝の高まりなどによって徐々に形成されたものである。記事に数多く引用されている毛のこれまでの水泳に関する発言がその事実を裏付けている。毛はその枠組みのなかで水泳という行為を再現してみせたのだが、一方で新たな要素を付け加えた。それまで毛を眺めるだけの存在だった大衆が、毛とともに泳ぐ存在になったということである(37)。大衆とともに泳ぐ毛の姿は、毛だけが大衆を理解し大衆とともにあることを、劉少奇率いる中共中央に強烈に見せつけたであろう。大衆こそ毛の権力の源泉であった(38)。

毛沢東と大衆の関係の変化を視覚的に示すのが、李秀実の「万里長江横渡」(1959年）と郭紹鋼、惲圻蒼「毛主席帯領我們在大風大浪中前進」（1971年　【図2】）である。ただし、後者の絵は毛の水泳から5年近く経って描かれたため、その後の文革の影響が見られる。もし毛の水泳直後に描かれていれば、沈堯伊の有名な木版画「緊跟毛主席在大風大浪中前進」のように、紅衛兵が毛を取り囲んでいたはずである(39)。

7月27日から8月17日まで連日のように『人民日報』に掲載された水泳関連記事は、毛が泳いだことを耳にした人々の反応と各地での水泳の実践に大別される。前者に関して、『人民日報』は地域や民族のバランスに配慮しつつ中国国内の人民の祝福の声を取り上げ、それが終わると、やはり地域のバランスに配慮しつつ世界各国の人民の声を紹介した。人民の声で一番多いのは、毛の健康に対する喜びだった。ここから、人々の関心（というより不安）が毛の身体（健康）に向けられていたことがわかる。毛が本格的に文革を発動するに当たって長江で泳いだのは、そうした人々の関心に応えるためであった。後者（水泳の実践）に関しては、参加者の数を誇示するものが多い。7月31日には約8,000人が北京の

図2　郭紹鋼、惲圻蒼「毛主席帯領我們在大風大浪中前進」（https://auction.artron.net/paimai-art61260738）

昆明湖を泳ぎ[40]、同日福州の閩江では約10万人が渡江大会に参加した[41]。

8月17日の「水泳のなかから水泳を習得する」は、『人民日報』の一連の水泳記事の締めくくりとなった。水泳を習得するには、水泳について学んでから水に入るのではなく、水泳しながら学ぶのである。革命も同じで、革命について学んでから革命をするのではなく、革命をしながら学ぶのである。こうして、毛の水泳は、毛の革命への参加を呼びかけるものとして意味づけられた。その翌日、毛は天安門上で100万の革命参加者を接見したのだった。

最後に、西側のメディアの反応について触れておこう。じつは毛が長江を泳いだことは、『読売新聞』がいちはやく報じていた。アジア・アフリカ作家緊急会議に出席し、武漢で毛の水泳を目撃した由起しげ子と窪田精が19日に香港から帰国するさいに、香港の読売新聞社特派員に語った内容が7月20日の『読売新聞』に掲載されている。

> 揚子江岸で行なわれた五千人の水泳大会にも姿をみせ、多勢の観衆の目の前で泳いだ。どのくらいの距離を泳いだのか観衆にさえぎられてはっきりわからなかったが、泳いだあと小舟に上がって選手たちと歓談していた。訪中前から毛主席病気説を耳にしていたが、あまりにも元気な姿をこの目でみて、かえってびっくりした。

内容には若干の混乱がある（泳いだ日が17日になっている。記者側のミスであろう）が、描写はおおむね正確である。同じくアジア・アフリカ作家緊急会議の出席者藤島宇内は、毛を目撃したときの様子について、船から大会を見ていると、一艘の鋼鉄船とすれちがったが、そこに「白い中山服を着た長身の人、毛主席が立って、こちらにむかって手をゆっくりとふっていた」と記している[42]。また、情報源は不明ながら、『陸上競技マガジン』は次のようにそのシーンを再現している。遊覧船に乗っていた外国の文化人たちは、接待役の中国人が背後からやってきた快速艇に向かって「毛主席」と叫びだしたので、「狐につままれたようにとまどい、しかも反射的にカメラを構えたり、水の方にからだをのりだしたりした」。それはたしかに毛沢東で白い人民服（ガウン？）を着ていたが、遊覧船の歓声には応えず「よそよそしいものであった」。毛の船はあっという間に過ぎ去り、外国文化人代表団は「あっけにとられてたがいに顔を見合わせた。風のように現れ、風のように去った毛沢東を、大遠泳大会と結びつけるいとまもなかった[43]」。もしそうだとすれば、外国の文化人たちは毛の水泳を文革と結びつけることなどできなかったであろう。外国人は海外向けというよりは、国内向けの宣伝のために必要だったのである[44]。

7月21日、『読売新聞』は猛烈な勢いでクロールをする毛沢東のイラストを掲載した[45]。

さらに31日にも同紙は、イギリスのデイリー・ミラー紙がこの写真について疑義を呈していること、世界プロ遠泳連盟の会長が毛沢東を16キロ遠泳レースに招待したことを、新華社の報道とともに皮肉交じりで紹介した。一方、『朝日新聞』は7月25日に北京放送が報じた内容を淡々と紹介した。毛の泳ぎぶりは「抜き手で波を切るかと思うと、ときにはあお向けになって雲ひとつない青空をながめていた」と描かれている。実際、毛は悠然と泳いだのだが、65分で30里（15 km とも17 km とも報じられた）という数字だけが一人歩きし、これは世界記録よりずっと早い、毛をオリンピックに参加させるべきだなどと、西側諸国の報道は疑念や揶揄に満ちたものが多かった[46]。長江の流れの速さを知らないままに、73歳の老人が世界記録を上回るようなスピードで15 km も泳いだと聞いたなら、疑念を抱くのはむしろ当然だったであろう[47]。しかも、国外の人々の多くは毛を崇拝するわけでもなく、毛の水泳に対する意味づけを共有していなかったのであるから、なおさらのことである。

1989年に評論家の草森紳一は「「中国文化大革命」の大宣伝」と題する連載の初回に毛の水泳を取り上げ、それが「彼の趣味ないし健康法が政治化し、練りに練った「プロレタリア文化大革命」の一大キャンペーンの序奏として意図され、たんにその健在の証明をすればよしとするものではなかった」と論じた[48]。

草森の言うように、このときの毛に必要だったのは、たんに「健在の証明」をすることではなかった。健在の証明をするだけなら、なにも水泳をする必要はなく、他にもさまざまな手段があったはずである。劉少奇率いる中共中央の指導者よりも、自分こそ中国の指導者としてふさわしいことを示すにはどうすればよいか。思想面での優位は揺るぎなかった。長期にわたって表舞台から遠ざかっていた毛に必要だったのは、生身の人間としての存在感だった。そのためには、たんに健康であるだけでなく、いまなお人並み以上の体力を持つことを示す必要があった[49]。その手段として水泳が適切であることはすぐに想起されただろう。しかし、ただの水泳ではだめである。というのも、十三陵水庫で毛が劉少奇と一緒に泳いだことは広く知られていたからだ。湘江や銭塘江のような地方河川でもだめだった。それでは中国の全人民を立ち上がらせることができないからだ。長江は中国を代表する河川であり、しかも毛は何度も泳いだ経験があり勝手がわかっていた[50]。

さらに草森は、毛の水泳のニュースを聞いて「それまではやや神秘的だったこの偉大な指導者が、身近になったように私は感じた。……毛沢東といえども、人間の血と肉でできていることがわかり、同時に私は強い尊敬の念に動かされた。もう一度あらためて、全身全霊で毛主席に仕えようと決心した」という元紅衛兵の手記を挙げ[51]、この少年は「ミステークを犯している。毛沢東の「長江水泳」の報をきいて、人間くささを感じれば、身近

になるどころか、遠くなるということに気づいていない。「毛沢東神話」は、その肉体性、個人性が発揮されればされるほど、偶像として確固たるものになる」とも論じている。

ここで草森が言いたいのは、毛が政治に身体を持ち込んだということであろう。新中国成立以来、政治は抽象的な理論や数字をあまりに重視してこなかったか。そこでは人民はもちろん、指導者でさえ、身体性を喪失してしまったのではないか。毛が理論や主義でなく身体を通して示そうとしたのは、そのようなことだったのではないか。だからこそ、毛の身体は、新中国の政治に疎外感を抱いていた人々に強く訴えかけ、彼らの政治参加を促進したのではないか。文革期に毛の身体は、宣伝画、バッジ、銅像などさまざまな形で人々の日常生活に溶け込んでいった。毛の存在はたしかに身近になったが、一方で人々をより強く支配するようにもなった。長江を泳ぐ前にその行為がもたらす意味について毛がどこまで考えていたかはわからないが、紅衛兵の姿で100万の大衆を接見したとき、毛は自らの身体が持つ政治的意味をはっきりと認識していたはずである。

Ⅳ　長江水泳の遺産（1967–1976年）

1967年7月16日は毛が長江で泳いでからちょうど1周年の記念日であった。『人民日報』は毛がガウン姿で手を振る有名な写真と毛の詞「水調歌頭·遊泳」、そして社説「永遠跟着毛主席在大風大浪中前進」を掲載した。タイトルこそ昨年7月26日の社説に「永遠」をつけただけだが、内容は前年の社説とは大きく異なり、「革命小将」擁護論となっている。その主張を簡単にまとめれば、文革の闘争のなかで誕生した「革命小将」（紅衛兵）は文革の一大成果であり、党と国家の貴重な財産であり、プロレタリア革命事業の後継者であるから、多少の誤りは容認し、彼らが団結し進歩するのを助けねばならない、というものである。

> 革命の小将は前例のない大革命の海のなかで水泳を学習しており、誤って水を飲んでしまうこともある。彼らは闘争の過程であれこれの過ちを犯すが、それは不思議でもないし、また是正するのも難しくはない。問題は、彼らが水泳をしながら水泳を習得し、闘争のなかから闘争を習得するのを我々がいかに手助けするかだ。

こうして社説は文革に対する批判を封じたのである。

1967年7月16日、文革への支持を示すべく各地で大規模な水泳大会が開かれた。北京だけでも5万人が各種の水泳活動に参加した[52]。武漢はどうだったか。じつはこのとき毛は武漢にいた。もちろん一周年記念の水泳大会に参加するためである[53]。毛はふたたび長江

で泳ぐことで文革をさらに推し進めようと考えていた。しかし、毛は武漢の水泳大会に姿を見せることはなかった[54]。当時武漢では百万雄師と工人総部という二つの大衆組織が対立し、緊迫した空気に包まれていた。20日にはいわゆる武漢事件が発生し、百万雄師のメンバーらが東湖賓館に突入して毛の腹心である王力を連行した。同じホテルに泊まっていた毛は飛行機で上海に向かい辛くも難を逃れた。

武漢事件はまもなく終息し、8月1日（中国人民解放軍の建軍節）に武漢で大規模な水泳大会が開かれた。『人民日報』が「これは武漢地区がプロレタリア文化大革命の新しい勝利の段階に入ったことを祝う大慶祝である」と位置づけたように[55]、この大会は武漢の新しい軍当局が毛沢東と文革を改めて支持するというメッセージだった。参加者は5万人にのぼり、長江両岸では「毛主席万歳」の声や『毛沢東語録』を朗読する声が絶えず、毛に対する「無限の熱愛、無限の信仰、無限の崇拝、無限の忠誠」の激情を示した、と報じられた。『人民日報』や『湖北日報』は語らないが、この大会では多数の溺死者が出ていた。『武漢市志体育志』はその数を「百余人」とするが、確かな人数は不明である[56]。1965年までは安全に対する注意が繰り返されていたが、1966年以降はもはやそのような配慮は見られなくなっていた。

もし1967年に毛が長江を泳ぐことに成功していれば、彼はその後も毎年長江で泳いだかもしれない。結局、1966年の長江水泳は毛が公開の場で泳いだ最後の機会となった。1968年以降も毎年7月16日には全国各地で水泳活動が繰り広げられるが、その規模もその報道も明らかに縮小した。毛が実際に泳がなくてもその目的が果たされるようになったともいえるし、文革が変質して毛の水泳を必要としなくなったともいえる。

表2は1966年に『人民日報』の水泳記念日に関する記事に見られた主なキーワードが、その後の『人民日報』の水泳記念日に関する記事でどのように用いられたかを示したものである。最も多くのキーワードが見られるのは1976年である。1976年は毛の水泳10周年にあたり多くの関連記事が掲載された。ひとまず1976年を除外して、全体の傾向を考察してみよう。

まず指摘できることは、キーワードの数の減少である。これは『人民日報』の水泳記念日関係の記事の減少に対応している。一貫して見られるのは1～4で、「毛主席とともに前進する」「大風大浪のなか」「江河湖海で泳ぐ」が共通する主題である。一方で、1970、71年以降ほとんど見られなくなるキーワードがある。6～12がそれに当たる。このうち、8と9は林彪と関係が深く、10はアメリカを敵視するもので、それぞれ林彪事件、アメリカとの関係改善が原因と考えられる。興味深いのは11で、前章で指摘したように、このキーワードは1966年の水泳を総括するものであったが、1969年を最後に使われなくなる。対照

的に、1970、71年以降に頻出するのが5である。これは毛の水泳を革命そのものではなく、革命の基礎としての体育として意義づけようとするものである。『人民日報』という限られた資料からの考察ではあるが、水泳と文革の関係は確実に変化しており、それは現実の文革の変化を反映していた。

7月16日の水泳記念日の重要性も低下していった。『人民日報』には毎年7月16日に各地で水泳に関連する活動が実施されたことが報道される。これらの記事で言及される地名(都市名、省名）を数えてみると、1971年までは20前後にのぼるが、1972年に7、1973、74年はわずか4しかない。1976年でも11である。ほぼ毎年言及されるのは北京、武漢、長沙、南寧である。いずれの都市も毛の水泳と関係が深い(表1参照)。これらについで多いのが、上海と天津である。表3は武漢の水泳大会の参加者数の推移をまとめたものである。1973年と1975年は少ないものの、おおむね5,000人を保っており、1972年と1976年は例年の倍の人数が参加している。少なくとも武漢では、水泳記念日は重要な行事であり続けたことが確認される。

風化しつつあった水泳記念日が1976年に盛大に実施されたのは、この年が10周年に当たるということ以上に、毛の健康への懸念、それと関係する後継者争いが関係するであろう。表2から1966年と1976年に共通するキーワードが多いことが読み取れるが、これは1976年の報道で10年前を振り返るものが多かったことを物語っている。しかし、同じキーワードでも異なる文脈で使われているものもある。「時代は変わった、男女はみな同じだ」は、1976年には批孔批林運動との関連で、男尊女卑の孔孟の道に反対するという形で用いられている[57]。林彪、周恩来なきいま、批判の矛先は鄧小平に向けられていた。各地の大会で「鄧を批判し、右傾翻案風に反撃する偉大な闘争を最後までやり遂げよう」というプラカードが掲げられた。これと関連して参加人数の多さが特筆されている。たとえば、天津市では泳ぐことのできる人の数は約202万人（全市総人口の29%）で、うち女性が44万人を占めた。「水泳の里」として名高い広東省東莞県は全人口の49.4%が泳ぐことができた。これらは、「党内の悔い改めようとしない走資派鄧小平が散布した「いまは昔に及ばない」という謬論に対する有力な批判」というわけである[58]。この年の大規模な水泳活動は、文革推進派による文革延命のための最後のあがきだった。

ただし、毛の死去、四人組の失脚を経ても、水泳活動は継続した。なぜなら、毛の後を継いだ華国鋒にとって、毛の権威（それは華国鋒の権威の唯一の来源であった）を維持することは必要だったからである。とはいえ、1977年の水泳記念日の報道はごく簡略で、湖南省でのいくつかの活動（長沙では1万人が参加する水泳活動がおこなわれた）を紹介するのみで、政治的なスローガンは一切見られない[59]。1978年は武漢、長沙、南寧、北京な

どで記念行事が開催されたことが報じられるが「長江の水は深く流れは急で、身体を鍛錬し、意志を鍛錬することができる」という言葉が引かれるのみである[60]。そして、華国鋒が失脚すると、水泳記念日に関する報道は『人民日報』から消えてしまう。もっとも、武漢や長沙での記念活動はなお存続したが、1980年以降は『湖北日報』『湖南日報』ですら紙面で取り上げなくなる。

おわりに

本稿は、毛の水泳に関する言説がいかに形成され、それが毛の水泳を解釈するフレームとなったかを明らかにしてきた。1966年7月16日、毛は突然長江を泳ぐが、それは従来思われていたほど突然ではなかった、というのが本論の結論である。それに先立つ2年間に、十三陵水庫での水泳、それを受けての大衆水泳活動、毛沢東への個人崇拝の高まり、権力闘争などの要因を通じて、すでに毛の水泳は準備されていた。文革を本格的に発動するにあたって長江を泳ぐという行動を選択した毛は、その意義と効果について、ある程度予測することができたはずである。

はじめにで取り上げた皇太子裕仁の場合、身体的に不安な要素があったからこそ、その身体の健全さが盛んに報道された。毛の場合も同じ現象が見られる。毛が元気に泳いでいる間、その様子が報道されることはほとんどなかった（これにはスターリン批判という背景もあった）。毛の水泳が大々的に報道されたのは、毛の健康が不安視されていたときであった。毛がこの水泳で大きな自信を得たことは間違いない。その後、毛の健康は悪化していったが、毛の長江水泳のイメージがさまざまな形で再生産されたことで、毛の身体イメージは健康さを保ち続けた。また毛にとっても、水泳は身体面での自信を呼び起こし続けたのではないか。それらは長江の水泳の遺産であり、晩年の毛がプールに住んだ一つの理由であったかもしれない。

表1　毛沢東の水泳歴

年月日	場所	備考	典拠
1954年7月26日–8月20日	北戴河	海で泳ぐのは初めて	①154–165; ④176–183
1955年6月中旬	銭塘江@杭州	6月10–18日滞在	①95–102; ④186–197
1955年6月20日	湘江@長沙	杭州から北京への帰り。湖南省体委游泳隊が同伴	①21–25; ③17–26
1955年8月6日–9月5日	北戴河	④178に胡志明の写真あるが、胡の中国滞在は6月25日–7月21日	②2: 415, 426
1955年9月14–25日	北戴河	15–23日まで毎日泳ぐ	②2: 435–436
1955年11月4–5日	上海	広州への途中。詳細な場所は不明	②2: 463–464
1956年5月30日	湘江@長沙	広州から北京への帰り。湖南省游泳運動員が同伴	①26–30; ③41–42
1956年5月31日、6月2、3日	長江@武漢	広州から北京への帰り。武漢市公安局水上護衛隊が同伴。31日、2時間4分、30里、2日、30里、3日、1時間、30里	①52–69; ④204–215
1957年7月	青島第二海水浴場	7月12日–8月11日滞在。16日に第一回	①165–170
1957年9月5–6日	長江@武漢	5日、30分、15里	①30; ②3: 200, 202
1957年9月7–8日	湘江@長沙	8日は中秋節。游泳健将が同伴	①30–33; ②3: 203; ③51–53
1957年9月10–11日	銭塘江@杭州	観潮	①102–105; ②3: 204
1958年1月7、12日	邕江@南寧	1月6–22日滞在。南寧業余体校游泳教練らが同伴	①111–112; ②3: 275, 278
1958年4月	珠江@広州	4月13日–5月1日滞在。少なくとも25、27–30日に泳ぐ	①49–51; ②3: 340, 342–343
1958年9月10–14日	長江@武漢	9月10–15日滞在	①81; ②3: 445–446
1958年9月15日	長江@安慶への途中	辺は1959夏初にかけるが誤り。40分、10里	①83–85; ②3: 447
1958年9月16日	長江@安慶	体育運動学校から少年游泳隊員が同伴	①80–83; ②3: 447
1959年6月23日	長江@武漢		②4: 77
1959年6月24日	湘江@長沙	6月24–28日滞在。27日は泳げず（年譜は泳いだとする）	①33–38; ②4: 78–79; ③81–86, 113–114
1959年6月26日	韶山水庫		①115–121; ②4: 79; ③101–104; ④129–133
1959年7月12日	廬山水庫		②4: 100
1959年7月20日、8月12日	長江@九江	12日、1時間20分、30里	①85–92; ②4: 108
1959年9月9日	密雲水庫		②4: 177
1960年7月3日–8月16日	北戴河	7月21–25日は北京。8月10日に胡志明と泳ぐ。④178の写真は1955年とあるがこのときのものであろう	②4: 438
1961年8月	銭塘江@杭州	7月14日–8月21日滞在	①105
1961年9月24日	長江@武漢	モンゴメリーとの会見中。40分、24里	②5: 28–29
1962年6月	銭塘江@杭州	5月30日–6月8日滞在	①105
1962年6月19、21日	長江@武漢		②5: 107
1962年7月25日–8月24日	北戴河		
1964年6月16日	北京十三陵水庫		①137–153; ②5: 362; ④139–144; ⑤1995.5.27
1966年6月22日	韶山水庫	6月16–28日に長沙、韶山に滞在。年譜は24日午前とするが誤りか	①127–129; ②5: 595; ③283
1966年7月16日	長江@武漢	1時間5分、30里	①69–80; ②5: 599–600; ⑤1966.7.25–26

典拠
①辺学祖『中流激水：毛沢東游泳紀事』中央文献出版社、2013年
②中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』中央文献出版社、2013年
③中共湖南省委党史研究室編『毛沢東五十次回湖南』湖南人民出版社、2013年
④孫勇『在毛主席身辺二十年』中央文献出版社、2015年
⑤『人民日報』

表2　『人民日報』水泳記事のキーワード

	キーワード	人民日報初出	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978
1	沿着伟大领袖毛主席开辟的航道破浪前进	1966	○	○	○	○	○	○			○	○		
2	永远跟着毛主席在大风大浪中前进	1966	○	○	○	○	○			○	○	○		
3	到大江大海里去游泳，到大风大浪中去锻炼 / 到江河湖海里去游泳	1964		○		○	○	○	○	○	○	○		
4	大风大浪也不可怕。人类社会就是从大风大浪中发展起来的	1965	○	○	○	○	○	○				○		
5	发展体育运动，增强人民体质	1952					○	○	○	○		○		
6	不管风吹浪打，胜似闲庭信步	1957	○		○	○						○		
7	长江水深流急，可以锻炼身体，可以锻炼意志	1966	○			○						○		○
8	活学活用毛主席著作 / 活学活用毛泽东思想	1961	○	○		○								
9	大海航行靠舵手／伟大舵手毛主席	1965	○	○		○								
10	长江，别人都说很大，其实，大，并不可怕。美帝国主义不是很大吗？我们顶了他一下，也没有啥。所以，世界上有些大的东西，其实并不可怕	1966	○		○	○								
11	在游泳中学会游泳	1966	○		○							○		
12	学游泳有个规律，摸到了规律就容易学会	1964			○							○		
13	游泳是同大自然作斗争的一种运动，你们应该到大江大河去锻炼	1965					○					○		
14	毛主席这样健康，精力这样充沛，这是全中国人民的最大幸福，是全世界革命人民的最大幸福！	1966					○					○		
15	时代不同了，男女都一样。男同志能办到的事情，女同志也能办得到	1966										○		

表3　武漢水泳大会一覧

回数	年月日	参加人数	備考
	1934年9月9日	44	
	1935年9月22日	201	
	1936年8月23日	176	
1	1956年6月24日	761	『人民』1956年6月25日、7月3日
	1956年6月30日	1,191	
2	1957年6月23日	1,544	
	1957年6月30日		
	1957年7月7日		
3	1958年8月31日	885	三級以上の水泳運動員が参加
4	1959年8月9日	1,409	
5	1960年8月13日	10,000	
6	1961年9月4日	153	二級以上の水泳運動員が参加
7	1962年8月26日	210	『人民』1962年8月27日。三級以上の水泳運動員と歴代10位以内の選手が参加
8	1963年8月18日	606	『人民』1963年8月20日。『武漢市志体育志』は8月8日とする
9	1964年7月26日	691	『人民』1964年7月27日
10	1965年7月27日	20,000	集団水泳、個人競技はなし
11	1966年7月15日	5,000	『人民』1966年7月19日。集団水泳、個人競技はなし
	1966年7月16日		
12	1967年7月16日	?	『湖北日報』1967年7月21日
	1967年8月1日	50,000	『人民』1967年8月2日
13	1968年7月16日		『人民』1968年7月17日。市の集団水泳と各大衆団体の個別の集団水泳が同時に実施
14	1969年7月16日	5,000	『人民』1969年7月17日
15	1970年7月16日	5,000	『人民』1970年7月17日
16	1971年7月16日	5,000	『人民』1971年7月17日
17	1972年7月16日	9,336	『人民』1972年7月17日
18	1973年7月16日	3,000	『人民』1973年7月17日
19	1974年7月16日	5,000	『人民』1974年7月17日
20	1975年7月16日	2,252	『人民』1975年7月17日
21	1976年7月16日	12,000	『人民』1976年7月17日
22	1977年7月16日	5,000	
23	1978年7月16日	520	個人競技。『湖北』1978年7月17日は6100人あまりが参加とする
24	1979年7月16日	250	『湖北』1979年7月17日は50名とする

典拠　『人民』は『人民日報』、『湖北』は『湖北日報』、その他は武漢地方志編纂委員会主編『武漢市志体育志』武漢大学出版社、1990年

註

(1) 張新蚕『紅色少女日記：一個紅衛兵的心霊軌跡』中国社会科学出版社、2003年、49頁。

(2) ラジオ放送では毛沢東と一緒に泳いだという少女がその感激を語った（「毛沢東はほんとうに泳いだか」『陸上競技マガジン』16巻15号、1966年12月）。

(3) Erik N. Jensen, *Body by Weimar: Athletes, Gender, and German Modernity*, Oxford University Press, 2013, p. 3.

(4) 坂上康博『昭和天皇とスポーツ：《玉体》の近代史』吉川弘文館、2016年。

(5) きわめて簡略なものだが、徐冰娜が毛の水泳に関する先行研究を整理している（「毛沢東在武漢暢游長江活動研究綜述」『世紀橋』2015年2期。徐によれば、これらの先行研究は体育学と党史、あるいは毛沢東の水泳という行為そのものを論じるものと毛沢東の水泳の政治的意味を考察するものに大別される。

(6) 周世釗「毛主席鍛錬身体的故事」『新体育』1958年18期（1958年9月21日）。

(7)「毛主席少年時代的体育生活」『新体育』1958年5期（1958年3月6日）、周世釗「毛主席鍛錬身体的故事（三続）」『新体育』1958年21期（1958年11月6日）。

(8) 辺学祖『中流擊水：毛沢東遊泳紀事』（中央文献出版社、2013年、95頁）によれば、毛は井崗山から北京入りするまで川で泳ぐことがなかったという。以下、注記のない限り、毛の水泳に関する記述は同書に依る。

(9)「一、鱶其他の怪物が棲息する為め危険。二、濁流にて水面、水中、水底の各々の流れが変化し且つ急流なるため危険。三、江中大小無数の渦巻あり人体位は、これに巻き込まる。四、江水は不潔にして多くの黴菌を含む。五、江水中沈む時は再び浮ばず、万一溺死するも死体さへ浮ばず」（西村節「揚子江横断より受けし私の所感」『体育と競技』1巻7号、1922年9月1日）。

(10) 大会を主催したのは武漢警備司令部で、司令官の葉蓬はスポーツの奨励者として知られていた。このほか、南京でも1940年代に同様の大会が開かれている。

(11) 宮強「毛主席四渡長江」（『新体育』1958年13期（1958年7月6日）、『長江日報』1957年6月13日の記事を一部改変、追記した文章）によれば、1956年6月3日に武漢市副市長で武漢市体育運動委員会主任の孫耀華が毛に大会開催を準備していると告げると、毛は安全に気をつけ、一人も溺死させてはならないと答えたという。

(12)『新体育』1957年15期（1957年8月6日）。

(13) 印紅標（森瑞枝訳）「文革時期の個人崇拝のメカニズム：ヒートアップとクールダウン」、土屋昌明「中国六〇年代と世界」研究会編『文化大革命を問い直す』勉誠出版、2016年所収。1956年9月の八全大会で鄧小平が個人崇拝反対の問題を提起したが、この問題に関して党ではコンセンサスを作ることができなかった。

(14) 金野純『中国社会と大衆動員：毛沢東時代の政治権力と民衆』御茶の水書房、2008年、59–60頁。

(15) 初出は『詩刊』1957年1月とされる。『新体育』57-4（1957年2月）などにも掲載された。

(16) 読み下しは武田泰淳、竹内実『毛沢東　その詩と人生』文藝春秋、1965年に依る。

(17)「毛主席游泳詞親筆原稿」『新体育』1959年2期（1959年1月21日）はこの詞を「我們読這首詞、不但可以体会毛主席対游泳運動的重視和提唱、也可体会到毛主席時刻擘劃国家建設大業的精神」と評価している。

(18) 回数の数え方にはバリエーションがある。ここでは辺学祖『中流擊水』52頁に依る。
(19) 老郝「「体育之研究」的重新発表」『新体育』1996年3期。
(20) 李紅娟「鴻幅巨作、展現領袖風采：読李秀実老師的《万里長江横渡》」『芸術市場』2007年2期。
(21) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』4巻、中央文献出版社、2013年、344–345頁；「広大群衆泛游江河湖海」『人民日報』1960年8月9日；張彩珍主編『中国游泳運動史』武漢出版社、1996年、119頁；武漢地方志編纂委員会主編『武漢市志体育志』武漢大学出版社、1990年、15頁。従来の参加者は多いときでも1,500人程度だった。後掲の表3を参照。
(22)「関於部隊開展游泳活動的指示」『毛沢東思想万歳』1968年武漢版（https://www.marxists.org/chinese/maozedong/1968/5-095.htm）
(23)『人民日報』1964年7月18日。「増強人們体質」は毛が1952年6月10日に中華全国体育総会第2届代表大会のために贈った言葉「発展体育運動、増強人民体質」を踏まえる。
(24) 胡濱、賈玉瑞「到江海河湖中去游泳」『新体育』1959年13期（1959年7月6日）。
(25)『人民日報』1964年7月18、19、25日。
(26)『人民日報』1964年7月24、25、27日、8月19日。
(27) この記事は1965年5月23日の『人民日報』にも転載された。
(28) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』5巻、491頁。
(29) 毛の水泳に関する記事に他の指導者が出てくることはほとんどないが、この記事は毛と劉少奇の様子を、ともに立派な体格をしていて親しみやすく、ゆったり軽やかに泳ぎ、物事に動じず泰然自若としていると描いている。劉は水泳を通じて毛のカリスマ性を受け継いだかのように読み取れるが、劉独自の行動や発言はほとんどない。劉はあくまで脇役であり、毛の偉大さを再確認させていると解釈することも可能である。
(30) 印紅標「文革時期の個人崇拝のメカニズム」。
(31)『人民日報』1964年8月19日など。
(32)『人民日報』1965年6月10、15日、7月4日など。
(33)『人民日報』1966年4月15日。
(34)『東京朝日新聞』1966年3月26日、5月1、2日。
(35) アジア・アフリカ緊急作家会議はアメリカ帝国主義だけでなく、ソ連修正主義にも反対し、それと対立するグループは翌8月にソ連で緊急集会を開催、アジア・アフリカ作家会議は事実上分裂した。しかし、文革の影響で、中国は撤退を余儀なくされる。
(36) たまたま現場にいて毛の泳ぐ様子をテレビカメラに収めた湖北電視台の陳鵬程は、撮影の際にこのことをしばらくは外部に漏らしてはならないと指示されたという（陳鵬程「我為採拍毛主席暢游長江独家電視新聞而自豪」『媒体時代』2010年11期）。このエピソードから、動画は偶然の産物で、意図して撮影されたものではなかったことがわかる。なお陳はこの映像が日本、イギリス、西ドイツ、エチオピア、香港などで放映され、日本人の女性がこれを見て感動したと述べているが、管見の限りこの映像に触れた日本の資料はなく、毛の水泳に関する日本人の文章もほとんどが『人民日報』『人民画報』に基づいていることから、その影響は大きくなかったと考える。
(37) 十三陵水庫でも青年たちが毛と一緒に泳いでいたが、彼らは北京の高等教育機関の学生と解放軍の戦士で、大衆を代表する存在とはいえない。
(38) 三品英憲「一九四〇年代における中国共産党と社会:「大衆路線」の浸透をめぐって」(『歴

史科学』203号、2011年）は「党内における毛沢東の確立とは､「大衆」に関する解釈権の独占が認められていく過程だった」と論じる。「在游泳中学会游泳」（『人民日報』1966年8月17日）も、「我々はいかなる時も大衆から離れてはならない。このようにして、我々は大衆を知り、大衆を理解し、大衆と道を共にすることができ、また十分に人民のために服務することができる」という毛の言葉を引いている。

(39) 于帆は沈堯伊の木版画が「領袖と人民が水と乳のように融け合う」様子を描いて「大風大浪」の主題を視覚化、形象化したと評価している。さらに、唐小禾の油絵「在大風大浪中前進」（1971年）に、その後の政治的変化の影響が見えることも指摘している。ただ、于は李秀実の絵を取り上げておらず、郭・惲の絵も軽く触れるにとどまっている（于帆「毛主席暢游長江」）。

(40)『人民日報』1966年8月1日。

(41)『人民日報』1966年8月5日。

(42) 藤島宇内「健在なり！揚子江を泳ぐ」『潮』133号、1970年11月。

(43)「毛沢東はほんとうに泳いだか」。

(44)『人民日報』には「外国の友人」の賞賛が記されているが、中国側の報道を情報源とする『朝日新聞』や『毎日新聞』では「外国の友人」の存在は触れられていない。

(45)『読売新聞』1966年7月21日。作者は近藤日出造である。

(46)「物言いついた毛沢東の遊泳」『世界週報』47巻32号、1966年8月9日。

(47) 毛のこれまでの長江水泳歴のなかで、今回がとくに速かったわけでもない。表1を参照。

(48) 草森紳一「毛沢東の「長江水泳」」『広告批評』113号、1989年1月。

(49) ウェーバーによれば、カリスマ的支配とは､「ある人物およびかれによって啓示されるか制定された秩序のもつ、神聖さとか超人的な力とかあるいは模範的資質への非日常的な帰依にもとづく」という（マックス・ウェーバー（濱嶋朗訳）『権力と支配』講談社、2012年、30頁）。

(50) 黄河がもう一つの候補であろう。毛はなんどか黄河を泳ごうとしたが、果たせなかった（辺学祖『中流擊水』178–184頁）。

(51) 草森は梁恒、ジュディス・シャピロ著、田畑光永訳『中国の冬：私が生きた文革の日々』サイマル出版会、1984年から引用している。

(52)『人民日報』1967年7月17日。

(53) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』6巻、101頁では7月13日に「一百万人游泳」があることを聞いて武漢に行くことを思いついたとする。武漢行きの経緯についてはそれ以外の見方もある（ロデリック・マクファーカー、マイケル・シェーンハルス（朝倉和子訳）『毛沢東最後の革命』上、青灯社、2010年、356–357頁）。

(54)『湖北日報』1967年7月21日。

(55)『人民日報』1967年8月2日。

(56) 武漢地方志編纂委員会主編『武漢市志体育志』16頁。ただし、中国のインターネット上には死者が「数百人」だったとする記事もある。

(57)『人民日報』1976年7月17日。

(58)『人民日報』1976年7月16日。

(59)『人民日報』1977年7月17日。

(60)『人民日報』1978年7月18日。